

令和 3 年 6 月 1 日現在

機関番号：34510

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00042

研究課題名(和文) 生の現象学・臨床哲学・人文社会学を横断する共同性・文化・多文化性に関する研究

研究課題名(英文) Study of community, culture and multiculturalism through the perspectives of phenomenology of life, clinical philosophy and social science

研究代表者

川瀬 雅也 (Kawase, Masaya)

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：30390537

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、共同体、文化、多文化性、間文化性などのテーマについて、社会科学的観点と哲学的観点とを横断する形で考察した。その結果、原始社会や前近代の社会から近代以後の社会への変遷の過程で、いかに共同体や共同体思想が変容してきたか、また、その変容の過程で、個人の生の次元がいかなる影響を被ったかを解明した。さらに、文化が本質的に向かう方向が、前近代から近代への社会の動向と重なるにしても、文化をその外へと開く契機は、原始社会や前近代の社会にみられた共同体思想や文化思想のうちに見いだせることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昨今の国際社会の状況は、共同体や文化のあり方をめぐって、極度に錯綜した状況を呈している。近代以降の国民国家の体制が、グローバリゼーションの波のなかで綻びはじめることで、一方では、国家、共同体、社会は多文化化すると同時に、他方では、本質主義的傾向、異文化廃絶の動き、そして、社会の分断化が際立ってきている。本研究は、こうした国際的状況を背景に、あらためて共同体や文化の歴史的変遷の本質的意味を問い直すとともに、異文化の廃絶でも、また、単なる多文化の棲み分けでもない、真の多文化性、間文化性のあり方を哲学的観点に立って考察し、提示した。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I considered the subjects such as community, culture, multiculturalism and interculturalism from the perspectives of social science and philosophy. As a result, I have elucidated how the structures and the concepts of community have changed in the transition from primitive and pre-modern societies to modern societies, and how the dimension of individual life has been affected by this transition. Furthermore, I have explicated that, even if the essential direction of the culture corresponds with the typical tendency of societies from pre-modern to modern era, we can find a moment to open the culture to its outside in the thought on community and culture that is seen in primitive and pre-modern societies.

研究分野：現代哲学

キーワード：共同体 文化 多文化性 間文化性 生の現象学 臨床哲学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、国際社会における錯綜した多文化社会の状況を背景としつつ、共同性や文化について、社会科学、生の現象学、臨床哲学の観点から考察することで、現在の多文化社会化の本質的要因と今後の多文化社会で要求される共同化のあり方を検討することを目的としてきた。

こうした研究課題を掲げた背景としては次の点をあげることができる。

(1) 昨今の国際社会の状況は、共同体や文化のあり方をめぐって、極度に錯綜した状況を呈している。近代以降の国民国家の体制が、グローバル化の波のなかで綻びはじめることによって、一方では、国家、共同体、社会は多文化化する方向に進むと同時に、他方では、本質主義的傾向、異文化廃絶の動き、そして、社会の分断化が際立ってきている。こうした状況のなかで、国際社会は、改めて共同体や文化の意味を問い直す必要性に直面している。

(2) こうした問題について、報告者は、平成 25 年度から 28 年度にかけて、科学研究費補助金の交付を受け、哲学的・倫理的観点から研究を行ってきたが、そうした研究では、理念的な考察が先行し、現実の共同体、文化、社会の状況、および、それらの歴史を踏まえた具体的な研究内容にはならなかった。そこで、本研究では、生の現象学や臨床哲学といった観点に、文化や共同体に関する社会科学の観点を加えて、再度、根本から問いを立て直すことを試みた。

(3) また、文化や共同体の哲学的探究のために、生の現象学や臨床哲学を選んだことも研究の背景と関連している。文化や共同体が学術的な考察の対象になる場合、注目されるのは、主に社会制度や構造であり、文化や共同体を生きる「個人」が注目されることはほとんどなかった。しかし、もし昨今の国際社会の錯綜が、「個人の生」を忘却したイデオロギーや社会制度の展開の結果であるならば、そうした錯綜から抜け出すためには、改めて、文化や共同体を「個人の生」という視点から考察しなおす必要がある。生の現象学や臨床哲学という視点は、そうした探究の可能性を開きうるものであり、こうした観点から、これらの哲学的立場が選択された。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような状況を背景として、次の点を研究の具体的目的として掲げた。

(1) 社会科学(人類学、宗教学、歴史学、政治学、社会学等)の諸成果を検証して、共同体や文化の歴史、あるいは、それらについての思想の変遷を詳らかにする。

共同体や文化については、これまでも、社会科学の各領域において、非常に豊かな研究が積み上げられてきた。本研究が、共同体や文化について、単に観念的に研究しようとするのではなく、現実の社会や歴史に即して具体的な形で研究しようとするかぎり、これら社会科学の諸成果を考慮することは不可欠である。また、こうした社会科学の諸成果についても、それらを共同体や文化に関する哲学的研究と対比することで、より本質的な意味において再考することが可能になる。

(2) ミシェル・アンリの生の現象学や木村敏の臨床哲学の観点から、絶対的個人が共同性を生きる形として文化を探究し、その本質の意味と構造を解明する。

本研究が注目する「個人」とは、ある集団の一員としての個人ではない。そうした個人はすでに共同体を前提してしまっている。ここでの「個人」とは、あらゆる一般性から切り離して理解された個人としての「絶対的個人」である。本研究は、この「絶対的個人」がその本質において共同性に開かれたものであることを論証し、そうした「絶対的個人」が共同性を生きる仕方としての文化の意味と構造を解明しようとする。

3. 研究の方法

本研究は、上記の研究目的(1)(2)を遂行するために、それぞれの目的に即して、次のような研究方法を設定した。

(1) 「共同体や文化の歴史、および、それらについての思想の変遷に関する研究」について：

人類学、宗教学などの考察をもとに、原始社会や未開社会、また、宗教的な思考・生活様式において、いかに共同性が構想され、さらに、それが文化の形成といかに関わるかを検証する。

特に問題となるのは、まず、原始社会や未開社会における共同意識や共同体の成立において、人間と自然・大地・原系列との関係がいかに機能したかであり、さらに、人間が生活の中で「聖なるもの」との結びつきをいかに意識し、そこからいかに共同体を育ててきたか、である。また、こうした自然・大地・原系列や聖なるものとの結びつきの意識がいかなる仕方でも文化形成に関与しているかを検証する。

歴史学、政治学、社会学などの考察をもとに、前近代から近代にかけての共同体意識の転換、また、こうした転換をもたらした社会的要因について考察する。

特に焦点になるのは、いわゆるナショナリズム論、または構築主義の立場の再考である。19 世紀以降、国民国家建設のために民族や文化が「伝統的なもの」として構築された面は否めないにしても、人々の日常生活に根づいた文化、人々の自然な共同性と結びついた生活文化の存在も考慮に入れる必要があり、こうした生活文化の観点から構築主義の議論を再考する。また、この生活文化の本質についても探究する。

(2) 「絶対的個人が共同性を生きる形としての文化の本質の意味と構造の解明」について：

ミシェル・アンリの共同体論、および、そのマルクス解釈の研究。

この研究は次の二つの準備段階を経て実施される。

A：ヘーゲル法哲学、および、ヘーゲル批判の検討。ヘーゲル法哲学における共同体論を研究

すると同時に、フォイエルバッハ、シュティルナー、マルクス等のヘーゲル批判を検証して、ヘーゲル共同体論の意味と射程を明らかにする。

B：マルクスの共同体論の研究。近年、マルクスのアソシエーション概念が再考され、注目を集めているが、とりわけ、マルクスが、ヘーゲルの国家論を批判しつつ、労働する個人という視点から出発して、いかに共同体の理論を構想・構築したかを検証する。

以上の二段階の準備を経て、ミシェル・アンリの共同体論、および、そのマルクス解釈の研究に着手する。アンリの共同体論の特徴は、人間の共同性を水平的・共時的関係としてではなく、個人とそれを根拠づける絶対的起源との垂直的・通時的関係に基づくものとして理解する点にある。ここでは、アンリが、こうした個人の概念から出発して、いかにマルクス思想を、また、マルクスの共同体論を解釈しているかを検討する。

木村敏の臨床哲学における共同体論の研究。「この私」としての絶対的個人から出発して共同性を論じたものとして、木村敏の共同体論を検討する。

木村は、独自の人間学的・現象学的な精神病理学の観点から、自己性を確立できない状況や、他者との共同性を生きられない状況を浮き彫りにするが、それは同時に、我々がいかに自らの自己を生き、いかに共同性を生きているかを明らかにしてくれる。そうした観点に基づいて、絶対的個人から出発した共同化の可能性を検討する。

個人が共同性を生きる形としての文化の解明。

以上のような絶対的個人という視点に立った共同性に関する議論を詳細に分析したうえで、文化を「個人が共同性を生きる形」として理解するとともに、個人の唯一性・単独性・自己性に根源的に基づきつつも他に開かれた文化の真相を詳らかにする。

4. 研究成果

本研究の成果としては、①上記の研究目的をある程度実現できたもの、②(とりわけ、新型コロナウイルス感染症への対応に迫られたため)いまだ研究途上であり、今後課題を残したもの、そして、③研究目的には掲げていなかったが、研究遂行の途上で新たに研究テーマとして設定し、取り組んだもの、がある。こうした研究成果の状況を、上記の「3. 研究の方法」で用いた記号との対応で述べると、次のようになる。

(1)については、全体として、研究目的をある程度実現できたと考えている。(2)-のうち、ヘーゲル法哲学関連の研究、および、マルクス共同体論の研究は基礎的な研究に留まり、十分に研究を進めることができなかった。他方、アンリの共同体論については、いまだ不十分さは残るものの、ある程度目的を実現できた。また、当初の目的にはなかった研究としては、社会契約論をはじめ、近代の共同体論、ヒューム、およびルソーの「共感」概念について研究し、ある程度の成果を挙げることができた。(2)-の木村敏の共同体論については、ある程度の成果をあげることができた。最後に、(2)-に関しては、当初の研究計画にはなかったターナーの「コムニタス」概念、およびベルクソンの社会論について検討し、そこから、ある一定の見通しを得ることはできたが、いまだ十分な成果を挙げられるにはいたっていない。

3年間の研究期間のうち最後の1年は、新型コロナウイルス感染症対応に迫られたため、全体として、十分に研究を進めることが困難であった。また、当初の目的にはなかった研究テーマを新たに発掘し、そうしたテーマに従事したことも、研究目的達成を遅らせる原因になった。しかし、新たなテーマの探究は、研究課題そのものの進展にとって必要な迂路でもあり、その意味では、研究の内容の充実のために、研究目的遂行の遅れは避け難いものであったと思われる。

以下、本研究の成果の概略について、個々の研究目的ごとに報告する。

(1)-：大塚久雄、真木悠介、エリアーデ、レヴィ=ストロース、アンダーソン等について考察することで、原始社会や未開社会における個人と共同体の関係、および、文化の形成について検討した。

大塚は、原始社会を生きる個人を「自然的個人」と呼ぶが、その場合の「自然的」とは、労働する個人が自然なる大地とともに、自然なる共同態に密着していることを意味している。つまり、大塚において、原始社会の人間は、大地および共同態との一体性のうちを生きるものとされているのである。

また、真木、エリアーデ、レヴィ=ストロース、そして、アンダーソンなどについての考察からは、このように、大地や共同体との一体性を生きる個人が、同時に、みずからの起源との一体性を生きるものとして理解されていることを明らかにした。原始社会や未開社会、あるいは、宗教的人間についての彼らの考察においては、人々と大地や共同体との繋がりの意味が、人々が自らの起源(原系列、祖先、神など)から切り離されず、常に自らの起源と共に生きていることの中にみだされている。しかも、この起源との一体性は、ある特異な時間意識として、つまり、現在を起源との「同時性」のうちにあるものとして理解する時間意識として捉えられているのである。それは、逆に言えば、原始社会や宗教的世界においては、人々が、自らの存在の意味を自らの起源との一体性のうちで理解しており、それが、彼らをして、大地や共同体と密着した生を営ませていると理解することができる。

だが、人々のあいだで分業が発達し、共同占取されていた土地や用具が徐々に私的に占取されるようになるにつれて、人々は、大地・共同体・起源から切り離され、さらに、そのようにして孤立した人々を再度結びつける原理として、近代的な国家、あるいは、市民社会が成立するようになる。そうした近代国家の形成のプロセスは、いわゆるナショナリズム論が詳細に分析してい

るところだが、本研究では、この点について、(1) - として、とりわけ、ゲルナー、アンダーソン、ホブズハウム、スミスなどについて考察した。

そのうち、ゲルナーとアンダーソンは、ともに、近代的な共同体の特質を「均質化」のうちに見いだしていることを明らかにした。基本的に、近代以前においては、人々はいまだ大地や起源と密接に結びつき、分業も自然な分業にとどまり、文化も、自然な由来や伝統に根ざした「下位文化」にとどまった。そうした段階では、居住区域の点でも、また、時間意識の点でも、人々は大地や神を共有する狭い共同体のなかにとどまっていた。つまり、人々は、民族、共同体、文化ごとに切り離されて生活し、また、それぞれの共同体が独自の時間観念をもっていたのである。

だが、人々が自然的なものから分離され、分業がいっそう発達すると、個々の集団や共同体を隔てる「壁」が低くなり、相互交流が活性化される。それによって、自然的な由来の異なる人々、異なる共同体どうしの人々でも、容易に交流ができるように、共通の言語などの「高文化」、そして、誰にでも開かれた普遍的な時間観念が登場するようになる。こうして人々は、伝統的な出自や由来とは無関係に、多くの人々と交流可能になるのだが、しかし、それは同時に、人々をよりいっそう伝統的な大地・共同体・起源から切り離し、彼らを空間的、時間的に普遍的な世界地平の住人にさせていくことになった。

こうしたことをゲルナーは「社会的エントロピー」という概念で、また、アンダーソンは「同時性」概念の変化ということの説明している。つまり、彼らは、伝統的な大地・共同体・起源に結びついている限りで、それぞれが特異な存在であった人々が、そうしたものから切り離され、均質化していくことに応じて、近代の共同体も、そのように均質化された個人を包摂する一般的な性格を持つに至ったとするのである。

だが、近代以前の共同体と、近代以後の共同体をどこまで明確に区別して理解できるかという問題については、さらに詳細な研究が必要だと言える。とりわけ、ナショナリズム論では、近代以後の共同体の構成要素としての「ネイション」概念が注目されているが、ナショナリズム論のなかの永続主義、原初主義は、ネイションを近代以前の共同体との連続性のうちで捉えようとするのであり、今後は、そうした解釈を視野に入れつつ、共同体の近代化について、より詳細に考察していく必要がある。

次に、(2)に関してだが、上に記したように、(2) - に掲げたヘーゲル法哲学関連の研究、および、マルクス共同体論の研究は基礎的な研究に留まった。しかし、ヘーゲルの『法哲学要綱』および、マルクスによるその批判(「ヘーゲル国法論の批判」、「ユダヤ人問題によせて」、「ヘーゲル法哲学の批判・序説」、「経済学・哲学草稿」)に関しては詳細に分析し、その思想内容を所属大学にて講義した。そこで得られた所見を報告しておく。

まず、ヘーゲル『法哲学要綱』の共同体論における家族、市民社会、国家は、ルソーの特殊意志と一般意志の概念を用いて理解することができる。家族とは、特殊意志が一般意志に埋没した状態、市民社会とは特殊意志が活性化し、一般意志が脆弱化している状態、そして、国家とは、特殊意志と一般意志が一致し、各人が特殊意志に従うことが同時一般意志を果たすことになる状態だと言える。

マルクスは、こうしたヘーゲル共同体論のうち、とりわけ国家の概念に着目し、それを批判している。ヘーゲルは国家を特殊意志ばかりが活性化した市民社会を乗り越えるものとして理解したが、マルクスによれば、ヘーゲルの国家概念は理念的・抽象的であり、具体的・現実的な理論になっていない。マルクスは、市民社会の問題は、市民社会的現実を、国家という理念で置き換えることによって解決されないのであり、むしろ、市民社会の中から新しい共同体が生まれ出されてくるのでなければならないとするのである。

だが、市民社会の人々は、社会のあり方によって、その本来の人間性を疎外されてしまっている。この本来の人間性は、人間が自然や他者とともに生きる仕方としての「労働」のうちに求められるべきであり、したがって、市民社会に見られる「労働疎外」をこそ取り除き、労働者を、したがって人間を解放し、人間が労働を通して、自然と、そして、他者と共に生きる新しい社会の構築をこそ目指すべきだとされたのである。

ヘーゲルにおける国家が、いわゆる近代の国民国家を意味するかぎり、それは、本質的に大地や起源から切り離された個人を均質化させ、一般的な共同体の成員として構成しようとする意図を含むものだと言えよう。そして、まさにそうした理念的・抽象的な国家観を批判するマルクスの共同体論は、人間の本質のうちに、大地や起源との根源的な結びつきを認め、それにもとづいて共同体のあり方を構想しようとするアンリや木村敏の共同体論(以下で説明する)と親和性を持つように思われる。だが、本研究においては、マルクスの共同体論について、これ以上、考察を深めることはできなかった。

また、この(2) - との関連では、当初の研究計画にはなかったテーマとして、社会契約論をはじめ、近代の共同体論、また、ヒューム、およびルソーの「共感」概念を検討し、ある程度の成果を挙げることができた。社会契約論は、一般に自然状態と社会状態を区別し、社会、つまり、市民社会の由来を説明しようとする学説だが、ホブズ、スピノザ、ロック、ルソー、カントなどについて考察するとともに、社会契約論に反論するヒュームの国家論をも考察することで、近代の思想家たちが、市民社会の形成の本質をどこに見いだしていたかを分析した。また、ヒュームとルソーにおいては、共感を共同体の本質として理解する思想が見られ、これを、共同体の成立条件を契約のうちに見る思想との対比において考察した。こうした、共感に基づく共同体の概念は、大地や起源の共有を共同体の本質として捉える原始社会や未開社会、あるいは宗教

共同体の理念と類似性を持つものとして、さらには、アンリや木村敏の共同体論に通じる観点を
持つものとして、いっそう深い考察を必要とするものであることが理解された。しかし、本研
究においては、そうした点にまで考察を深めることはできなかった。

(2) - は、先述したヘーゲル国家論、マルクス共同体論の考察を経て、アンリの共同体論
の意味、および、アンリによるマルクス共同体論の解釈について解明しようとするものである。
そのうち、アンリによるマルクス共同体論の解釈については、十分な成果を挙げるには至らな
かったが、アンリの共同体論の意味については、一定の成果をうることができた。

アンリは、先に大塚、真木、エリアーデ、レヴィ=ストロース、アンダーソン等について見た
ように、諸個人と大地・共同体を一体性のうちにあるものとみなし、この一体性の根拠を、諸個
人の生が、本質的に、あらゆる生の起源としての絶対的な「生」に結びつき、それと「同時に」、
存在していることのうちに見いだしている。アンリによれば、人間にとっての「本源的共同体」
とは、このように起源と「同時」に存在することを通して「同時」に、つまり、共に生きる諸個
人の共同体であり、要するに、起源との同時性を通して人々が同時に生きることで形成される共
同体である。アンリにおいて、個人を「絶対的個人」にしているのは、その起源としての絶対的
「生」との結びつきだとされるのだが、その意味で、こうしたアンリの共同体論は、絶対的個人
という視点に立った共同体論であると言える。

だが、アンリは同時に、個人の生が経済や政治のうちに取り込まれることで、大地や起源とし
ての絶対的「生」から切り離され、それが「本源的共同体」を崩壊させて、人々の共同のあり方
を政治的共同体へと変質させたとしている。アンリによれば、政治的共同体とは、経済的、政治
的に等価で、均質なものとして理解された個人を、一般的な体系のうちに並置させたものであり、
アンリは、そこに、個人の生の切下げという暴力を読みとるのである。アンリが、生の現象学の
視点にたって導き出す、政治的共同体の原理に関するこうした解釈は、先に見た、ゲルナーやア
ンダーソンによる近代以後の共同体の原理に関する考察を、哲学的・現象学的な観点からより深
く掘り下げたものだと言えよう。生の現象学は、共同体の原理の本質的変容の根底に、個人の生
を切下げる暴力をみいだすが、そうした視点は、共同体の変遷に関する社会科学的考察をより根
源的な立場から見直す機会をも与えるものと思われる。

(2) - の木村敏の共同体論についても、ここまで見てきた前近代的な共同体概念の骨格が、
また、アンリ共同体論と同型の思想がみいだされることが確認された。木村においては、起源と
しての絶対的「生」はゾーエーと呼ばれ、このゾーエーの個人の生における現れがピオスと呼ば
れたが、木村は、こうしたゾーエーとピオスの関係を、各ピオスに共通のゾーエーと、それを共
に体現する個々のピオスの関係としても理解し、そこに共同体の本質を見いだしている。各個人
は、同じゾーエーを共有する存在として、その存在の根底において、他の個人と結びついており、
それが根源的に集団や共同体の可能性をなしていると言われるのである。木村にとって、ゾーエー
とは、アンリ同様、個人を絶対的個人として規定しているものだとされ、その意味で、こうした
木村の共同体論も、絶対的個人という視点に立った共同体の考察だと言える。

最後の(2) - に関しても、当初の計画になかったターナーの「コムニタス」概念とベルク
ソンの「開かれた社会」概念の検討を行い、そこから一定の成果を得ることができた。

この研究においては、まず、文化というものを「事象を区切ること、および、その区切りの産
物」として規定した。人間は、身のまわりの諸事象(自然の諸現象、時間の流れ、土地の連続等)
を諸々に区切り、そこに象徴的な意味を与え、共同体を通してそれを伝承していくが、このよう
にして事象を区切ること、および、共同体を通して伝承される区切りの産物を「文化」として規
定した。そして、そのうえで、共同体のあり方と文化のあり方の関係を、ターナーの「コムニタ
ス」概念、および、ベルクソンの「開かれた社会」概念を用いて検討したのである。

ターナーの「コムニタス」、およびベルクソンの「開かれた社会」は、共同体の成員が特異な
一体性、とりわけ、起源の共有に基づく一体性を形成するような共同体だと言えるが、こうした
共同体の形成は、上にみた事象の区切りを本質する文化の方向性とは逆の方向性を持つと言え
る。したがって、基本的に、文化の担い手としての共同体は、ターナーにおける「構造」やベル
クソンにおける「閉じられた社会」だと言えるが、しかし、コムニタスや開かれた社会といった
起源の共有にもとづく共同体を、構造や閉じられた社会の根底に存し、たえず、それらを活性化
している共同体のあり方として理解するならば、たとえ文化が、基本的に、構造化や制度化の方
向に進むものであったとしても、そうした文化を、単なる形骸化された文化としてでなく、生き
た文化、また、他の文化へと開かれた文化として可能にしているのは、コムニタスや開かれた社
会のような起源の共有にもとづく共同体のあり方であると考えられるのである。

ここで、起源の共有に基づく共同体と述べたのは、本研究の他の課題においては、例えば、原
始共同体や宗教的共同体として、また、マルクスがヘーゲル国家論を批判して構想する新しい共
同として、さらには、アンリや木村敏が提唱する、絶対的「生」やゾーエーに基づく共同体とし
て理解されたものであり、その意味で、このターナーおよびベルクソンに関する研究は、これま
での絶対的個人や共同体についての研究を、生きた文化、開かれた文化、あるいは、「生活文化」
の問題との関連の中で考察することを可能にした研究だと言える。

本研究は、最終的に、「現在の多文化社会化の本質的要因と今後の多文化社会で要求される共
同化のあり方」について解明するには至らなかったが、しかし、そうした問題へ向けて大きく前
進したこと、また、研究の途上で、上記の問題の解決のために、さらに検討が必要となる多くの
課題について明確化できたことは確かだと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川瀬雅也	4. 巻 120
2. 論文標題 コムニタスと開かれた文化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究紀要	6. 最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川瀬雅也	4. 巻 665
2. 論文標題 共同体の諸原理と生の現象学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館文学（谷徹教授退職記念論集）	6. 最初と最後の頁 148-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaya KAWASE	4. 巻 1
2. 論文標題 La phenomenologie du "beau" selon Michel Henry et Bin Kimura	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 LE BEAU, Actes du XXXVIe Congres de l'ASPLF Editura Universitaii Alexandru Ioan Cuza Iasi.	6. 最初と最後の頁 324-330
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaaya KAWASE	4. 巻 1
2. 論文標題 L'Experience de l'immediatete; : Sur la phenomenologie de la vie chez Michel Henry et Bin Kimura.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Revue philosophique de la France et de l'etranger (Presses Universitaires de France)	6. 最初と最後の頁 525-544
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Masaya KAWASE
2. 発表標題 Le monde-de-la-vie et le monde du sens commun
3. 学会等名 Colloque international de philosophie, "Penser LE MONDE et l'habiter : Les phenomenologies a l'epreuve, Fonds Michel Henry, Universite catholique de Louvain. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川瀬 雅也
2. 発表標題 コムニタスと開かれた文化、あるいは、愛について
3. 学会等名 間文化現象学ワークショップ（立命館大学間文化研究センター 立命館大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 川瀬 雅也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 342
3. 書名 生の現象学とは何か	

1. 著者名 Masaya KAWASE	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Presses universitaires de Louvain	5. 総ページ数 550
3. 書名 Considerations phenomenologiques sur le monde. Entre theories et pratiques.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------